□高野伸二(編)：**日本の野鳥** 591 pp. 1985. 山と渓谷社，東京．￥4,500．故高野伸二氏は日本野鳥の会の理事として高名だった人。鳥類は世界に約9000種が生息し，日本国内で記録されたものは1985年現在で536種である。この中の約30%は国内で極めて稀にしか記録されていない。日本に生息し，また定期に渡来する野鳥は350種という。静止の状態，飛翔の状態，四季の羽毛の変化，成幼の差など，各種について見開きの2頁分に解説とイラスト的の側面観を加えた導入部があり誠に魅力的である。もちろん多くの研究者，専門的写真家の協力が得られている。日本には植物分布の結果論たるいわゆる“点描派”にはかなりの出版がある。生態学，地形学的な分布論も勿論あるが，分布動態学とでも呼ぶべき著書は全くないし，論文もほとんどない。鳥の消化管を通じて，あるいは体表に附着することによる分布の研究は評者の不明のためか無いのに等しい。河川，潮流，風力などによる実験的または実視的研究も同様である。この美しい写真帳を見ながら，つくずく思うのである。漂流による分布は江戸時代以来のいわゆる“漂流物”の伝統はあるにはあったが。 (津山 尚)

□岩槻邦男・下園文雄：**滅びゆく植物を救う科学**—ムニンノボタンを小笠原に復元する試み 155 pp., 1 color pl. 1987. 研成社，東京．￥1,200．著者は東京大学理学部附属植物園長（教授）および同園技官。大平洋中に弧在する小島群 小笠原諸島には固有植物が多いので注目されている。これらの中の一部のものは近来個体数が激減しつつあって，絶滅への危険度は加速度的に増大している。この現象はコウノトリ，トキなどの動物における絶滅に類した生物種（危険種）の場合と全く同一で，生命への尊厳への冒瀆であるばかりでなく，貴重な潜在遺伝子の永久的な喪失をも意味する。本書は父島にただ1個体のみが生き残っているムニンノボタン *Melastoma tetramerum* Hayata (1913) を象徴的にとり上げて，これをいかに人工的に増殖し，いかに再び原産地に定着させることに成功したかを述べた。いわゆる危険植物 (endangered plants) の復元試行の諸過程を解説した。むしろ解説ではなくて，広く世に訴えかけているのである。本文の構成は科学的ではあるが，心理的には劇的である。ことがらの背景として，小笠原の植物の伐開・盗採，ヤギなどの家畜の導入，異常気象の小島嶼に与える極限的な影響，外来植物との競争の歴史が略述さられている。巻頭のカラー図版にはムニンノボタンのほかに，ムニンフトモモ，アサヒエビネの写真がある。オガサワラツツジ，数種のラン科とその周辺の事情も書かれている。レーチェル・カーソン女史の名著‘沈黙の春’(The silent spring, 1962) は世界における近年の人為の環境破壊が，いかに悲惨な公害をもたらし，人類を含む動植物，地球の全環境に巨大な影響を与えたかを警告し，米国その他でベスト・セラーとなった。本書ではこれとは逆に一小地点に生き残る1株の植物の歴史と未来への展望を通じて，地球の歴史からの贈りもの，失われれば二度と帰らぬ生物種，それらの持つ潜在遺伝資源の貴重さを説く。最後に著者らは植物園の研究と事業，その内実，限界を訴え，世の支援をもとめているかに見える。 (津山 尚)